雨漏りバケツとかけてダムと解く。その心は？

尼崎市　細川　ゆう子

最近、始めて川辺川･球磨川流域を訪ねた。熊本では、それぞれの地域で川辺川ダムに反対する活動をなさっている方がおられる。バトンリレーで流域を案内してくださったが、とにかく皆さん博識で大変勉強になった。その後、今本先生からうれしくなる話を聞いた。八代市でお世話になったつる祥子さんが「ダムは、雨漏りのバケツのようなものですね」とおっしゃったそうなのだ。河川の勉強をしてきて、同じようなことを考えている方に偶然めぐり会えた。とってもうれしかったので、調子に乗って意見書を書くことにした。

河川管理者は洪水のことを説明する時に、よく日本の河川が大陸の河川と違い急峻であることを取り上げる。日本の河川は、構造的に水害に遭いやすいというのだ。日本家屋の屋根も同様、手入れを怠ると雨漏りする。雨漏りする屋根の抜本的な対策は、屋根をすべてふき返ることだ。川で言うと、大々的な河道改修や堤防を土台からつくり直すことに当たる。たいていの人は「そこまでやることはない」と思うだろう。

そこで、とりあえず思いつくのが雨漏りをバケツで受けることだ。雨漏りした場所に置いておけば、床が濡れるのを防いでくれる。水を入れておいて使えるので、普段も役に立つのが売りだ。しかし、溜めた水は腐るので「庭木の水まきぐらいにしか使えない」と評判が悪い。最近は、そこまでしなくても水に不自由がない。それより、普段置いておくのは、蹴つまずいたりしてとにかく生活のじゃまなのだ。（環境にすこぶる悪い）

ダムとは、そうしたものではないだろうか。洪水被害のあった場所でダム計画が持ち上がる。治水単独では小さなダムしかつくれず建設費用に合わないから、利水を乗せて多目的ダムにし、計画は巨大化する。いつのまにか、バカでっかいバケツを置くのと同じことになる。バケツは、めったにいっぱいにはならない。でも、いっぱい以上も溜められない。結局、あふれることもある。いくら「ここで漏るだろう」と予測して置いておいても、実は他から漏るかもしれない。雨漏りする場所が何ヶ所もあれば、もうお手上げだ。なぜならこのバケツ、酸性雨にも耐えるために純金製で、たった一個で、屋根を応急処置するより高くついてしまうのだ。

ダムが雨漏りバケツなら、堤防の補強は屋根の応急処置だ。屋根に上がって雨漏りする場所を調べて、詰め物をしたり板をあてたりして、漏らないようにする。バケツなら、いくら溜められるかわかりやすい。だけど漏らないように防ぐのは、漏らないのだから定量的に効果を評価することができない。また漏らないように直せるかどうかは、職人の技術や経験にかかっている。だが職人の努力次第では、完全に雨漏りを防げるのだ。なぜ職人たち（河川管理者）は、雨漏りを防ぐために最大限の努力をして、技術と経験を磨こうとしてくれないのか。バケツを置くだけなんて、職人の腕が泣くじゃないか。

今の河川整備の状況は、河川管理者が職人の誇りを失い、安易なバケツの押し売りに走っていることが最大の問題だ。雨漏りを直してほしいと言われて、屋根に上がってもみず「バケツの方がお買い得ですよ」と売りつけるのだ。しかも最近は、最初から底に穴のあいたバケツまで発売され、主力商品になっている。国民が 10 円安い卵や牛乳を求めてスーパーを走り回っているときに、何もかもが値上げでため息をついているときに、こんな怠け者の屋根職人が許せるだろうか？

私は、河川管理者に技術者としての誇りを取り戻してほしい。堤防の補強は、取り組む価値のある仕事だ。堤防の安全性に不安を抱く国民みんなが、河川管理者の仕事に期待している。その期待に応えてほしい。破堤を防ぐ補強をすることは、ダムのように効果を定量的に表せないけれど、必ず国民に感謝される。

職人さん。もうバケツの押し売りはやめて、屋根の修理をしませんか？